

若手教員の頃、研究主任の先生がよく私の授業を見に来てくれた。つたない授業でも良い点を探して褒め、その上で課題を指摘してくれた。こうした指導を通して授業に自信が付き、提示された改善点が次の目標になるようなこともあった。

これからの教育の在り方などを見据え、校内研究の方向性を示す研究主任の姿に強く憧れたことを覚えている。

学校教育目標の下、どの学校でも全教職員が一丸となって授業改善に取り組んでいる。自らも実践者として同じフィールドに立ち、同じ方向性でチームを引っ張る役割が研究主任である。管理職から研究主任を任される場合も少なくないだろう。

その際、同僚一人一人に寄り添う「コミュニケーション能力の高さ、学校の現状と照ら

学校のハブ的存在に

「コミュカ」など強み発揮

し合わせて新たな試みを提案できるフットワークの軽さなど、自身の持つ良さが評価されているはずである。

その強みを発揮し、学校のハブ的存在になってほしいと願っている。

教育界の最新情報に興味・関心を持ち、勉強することも研究主任の重要な仕事の一つである。例えば、次期学習指導要領の改訂を控えている今、最新情報を追おうとする意欲的な姿勢は欠かせないだろう。しかし、学校の

同僚の負担感を減らすためにも、先輩方のような計画性を持ち、

実態に合わせて必要な情報を伝える力も必要である。教員一人一人が日々多忙であるからこそ、現時点で必要な情報を取捨選択できる

管理職（副校長・教頭）になり、そこで改めて研究主任という役割の大きさに気付くことができた。校長が示す学校経営方針と校内研究を結び付け、研究主任を支える役割に代

情報を取捨選択できる。かなりの知識量と、それを適切に判断できる力も不可欠である。

研究主任を任された際に苦勞したことがある。その年は研究の最終年度で、これまでの積み重ねを一つの形（研究紀要）にまとめなければならなかったからである。学校全体で取り組んでいたのは、各教

教職15年目で初めて研究主任を務めた際に苦勞したことがある。その年は研究の最終年度で、これまでの積み重ねを一つの形（研究紀要）にまとめなければならなかったからである。学校全体で取り組んでいたのは、各教

ベテランの経験年数、中堅の勢い、若手の感性が融合し、世代がつながっていくのを感じた。経験年数や専門とする教科の違いを超えて授業を見合い、

その年、同僚一人一人に寄り添う「コミュニケーション能力の高さ、学校の現状と照ら

アドバイスし合える同僚性こそが、学校の力を確実に高めていくだろう。

その年、同僚一人一人に寄り添う「コミュニケーション能力の高さ、学校の現状と照ら

アドバイスし合える同僚性こそが、学校の力を確実に高めていくだろう。

その年、同僚一人一人に寄り添う「コミュニケーション能力の高さ、学校の現状と照ら

アドバイスし合える同僚性こそが、学校の力を確実に高めていくだろう。



森田 哲史

埼玉大学准教授

(元さいたま市立小学校教頭)

①

【今回は6日掲載】

大学に勤務するようになり、少し離れた立場から校内研究に関わる中で感じることもある。それは「やらされ感」が出てしまうことである。ただでさえ忙しいにもかかわらず、無理やり研究や研修をやらされている…。そう受け止め、「研究や研修は『悪』」という印象を持ってしまう教師もいるようだ。働き方改革の視点から、校内研修を削ろうとする傾向もあるという。

校内研究が軌道に乗ったことで、子どもたちは落ち着き、生徒指導上の問題も減ってきたという。しかし、当初は教員間に研究と向き合う温度差が見られることもあったようだ。例えば、研究主任は課題を見いだそうとするあまり、教員一人一人の授業や子どもたちの姿の改善すべき点に目を向けやすくなる。もちろん、そのよう

課題や改善点だけでなく 強み、成果にも目を

な姿勢も大事なことである。しかし、マイナスイ面ばかり指摘していると、どうしても職員室は暗くなってしまう。そうした状態が常態化してしまうと、学校全体の研修に対する意欲も下がってしまうことだろう。

そこで課題と同じく、良い面や成果にも目を向けてほしい。学校や教職員の良さや子どもたちの強みを見つけて、それを広め、伸ばしていく取り組みも必要である。良さを認め合うことで教師は自信を持ち、新たな授業づくりにチャレンジできるからである。それは、若い頃に研究主任の先輩から授業の良いところを褒めていただいた、私自身の経験とも重なる。

研究を推進する際に、国の動向や学校の実態、校内でのような授業改善が求められるているかを把握するのは欠かせない。それを踏まえた上で、例えば「思考力」なら「ひろげる、しぼる」などのその学校に合ったキーワードを見だし、共

通言語として設定するのは非常に効果的である。それが研究の方向性を示し、子どもや保護者にも浸透することが期待できる。

10月以降は研究発表会を行う学校も多い。開催まで運営の調整などで忙しい時期である。それが無事に終わると、これまでの成果と課題をまとめ、次年度の研究計画の検討に着手することだろう。校内の意見を取りまとめ、さらなる授業改善に取り組んでほしい。

授業が変われば子どもも変わり、子どもが変われば学級や学校も変わっていく。教職員が仲良く和気あいあいと研修に取り組む姿を見て、子どもたちは憧れや安心感を持つはずである。研究や研修は、教師の負担を増やすためではなく学校を良くしていくための営みである。

学校の雰囲気づくりを担う一人が、研究主任である。大変な仕事かもしれない。子どもたちはもちろん、教職員と自身の成長が、学校の未来を支える人材の育成につながっていることも忘れないでほしい。



森田 哲史

埼玉大学准教授

(元さいたま市立小学校教頭)

①

掲載】

【次回は11月2日付